

日本では長かった梅雨が明け、梅雨明け直後の厳しい暑さが続いています。カンパラでは乾季を迎え最高気温も 25、6 度で吹く風も心地よい気候となりました。7 月は風が強くビクトリア湖で漁業ができない時期もあるようです。

ウガンダの隣国、ルワンダの初代中央銀行総裁として 1965 年に IMF から派遣された日銀出身の日本人である故・服部正也氏の著書(「ルワンダ中央銀行総裁日記」1972 年刊行、中公新書)に次の記述があります。

「途上国の発展を阻む最大の障害は人の問題であるが、その発展の最大の要素もまた人なのである。」(前出、p.298、2021 年増補版 13 版)

### 1. 「あしなが育英会」のウガンダでの取り組み

今月はウガンダで人材育成にあたる、日本の「あしなが育英会」の取り組みについてご紹介したいと思います。

「あしなが育英会」は、病気や災害、自死で親を亡くした遺児への支援を日本で行っている団体です。1995 年に阪神淡路大震災が起こり、震災で遺児となった方の支援が開始されました。その支援を受けた震災遺児の皆さんは世界中から集まった寄付をもとにその恩返しとして、世界で最も貧困遺児が多いアフリカ支援を提唱しました。こうして 2000 年にエイズ遺児が多いウガンダに入られたのが現在の活動の始まりです。首都カンパラ郊外のナンサナで「あしながウガンダ・レインボーハウス」が運営されており、エイズ遺児への心のケアと基礎教育が実施されています。

私も今月、レインボーハウスを訪問しました。

レインボーハウスはナンサナ地区の遺児を約 1000 人支援しており、その中の約 100 名の生徒さんがレインボーハウス内にある寺子屋で毎日勉強しています。私が訪問した日も元気な声が響いていました。施設の中で最も印象に残ったのはケアプログラムです。言葉や社会的背景は違っても保護者を幼くして亡くした子どもたちの心のケアが必要なことは世界のどこでも同じです。子どもたちの作品が壁に貼られた談話室。真っ赤な壁と天井から吊されたパンチングバッグがある部屋。ここで子どもたちの気持ちをほぐし、将来に向けた心のケアを行っています。ケアをうけた子どもは大学に入るまで、いつでもここに戻ってくる事ができるそうです。あしながウガンダの遺児の中には高等教育を受けるまで支援を受ける生徒もいます。これまでに 60 人を超える遺児の皆さんが日本の大学に進学したとのこと。



[寺子屋の生徒たちと]



[寺子屋の授業見学]

あしながウガンダのもう一つの柱が「アフリカ遺児高等教育支援 100 年構想プロジェクト」です。何らかの理由で保護者をなくした遺児をアフリカ全土から選抜し、まず約半年間、学生寮「あしながウガンダ心塾」で大学進学のための準備を行います。進学先が決まれば、さらに数ヶ月、海外への渡航の準備を行います。このプロセスは毎年行われています。ウガンダのあしなが心塾では英語圏及びポルトガル語圏の高等教育への進学を目指す若者を支援しています。(フランス語圏についてはセネガル事務所が対応。)

今年はアフリカ各国から約 20 名の学生が集まったオープニングの日に、私も招いていただきました。オンラインで日本からあしなが運動の創始者である玉井義臣氏も参加されました。2014 年に始まったこの構想によって、アフリカ各国の遺児は日本および世界の大学にすでに 325 人が進学を果たしたとのこと。



[100 年構想の参加者の皆さんと]



[心塾生徒の皆さん]

冒頭ご紹介いたしました服部正也氏がその慧眼で喝破したように、国や社会の発展にとり決定的な要素の 1 つは「人」だと思います。あしなが育英会はレインボーハウスを 20 年以上、心塾の「100 年構想」の取り組みを 10 年以上続けてきています。

心強いことにウガンダの施設の責任者はあしながで育ったウガンダの方です。多くのスタッフもあしなが出身者です。また、あしながの施設があるナンサナの市長さんは驚くべきことにあしなが出身で、日本にも留学したジョセフ・マトブ氏が勤めています。

「誰一人取り残さない」というのは SDGs の標語ですが、その実践は容易ではありません。あしながウガンダの取り組みはその貴重な実践の一つです。課題もまだ多くあるのが現実ですが、このような取り組みを力強く応援していきたいと思います。

## 2. 日本財団笹川会長ご一行のウガンダ訪問

7月25日から27日にかけて笹川陽平日本財団会長ご一行がウガンダを訪問されました。エチオピアでハンセン病制圧に関する活動を行われ、引き続いての訪問です。

日本財団が笹川アフリカ協会(現ササカワ・アフリカ財団。SAA)を設立したのは1986年のことです。以来、長きにわたりアフリカでの農業支援を実施してきました。その活動によりサブサハラアフリカの数百万人の農民が恩恵を受けたとも言われています。現在、SAAは、ウガンダのほか、エチオピア、マリ、ナイジェリアの4カ国を中心に事業を展開しています。農産品の生産拡充のみならず、その後の加工や販売のいわゆるバリューチェーンの構築、さらに人材育成に至るまで幅広く支援活動を行っています。SAAはいち早く環境再生型農業を提唱されました。当初、アフリカでこのような考えを実践出来るのか、という声もありましたが今や主流の考え方になっています。

今回の訪問では、ムセベニ大統領、農業省を表敬されたのち現場の視察を実施。アミット・ロイ SAA 会長も加わった視察に私も同行させていただきました。

ウガンダに14箇所展開するワンストップセンター(OSCA)のひとつであるカンパラ近郊のズィローブウェ・アガリアワム・アグリビジネス研修組合(ZAABTA)他を訪問しました。SAAのモットーは「農民と共に」(Walking with the Farmer)です。笹川会長の人生の行動哲学は、「現場には問題点とその答えがある」です。御歳85才の「青年」である会長(この出張でも何度かウガンダの方を前にこう言われていました。)は精力的に各所を視察、多くの現場関係者の方々と意見交換をされていました。ある場所では以前、ボダボダ(人を乗せるタクシーオートバイ)の運転手だった青年が紹介されました。この方はもっと人々の暮らしを支える仕事がしたい、それはやはり農業であると思いたちSAAの支援を活用して現在では農業に従事し充実した日々を送っているとのことです。ワンストップセンターの責任者の中には女性も多く活躍しておられます。

ウガンダの人口の7割から8割は農業に関係していると言われます。ウガンダは気候と豊かな土地にも恵まれています。農業の発展は国の発展とほぼ同義です。日本の食料安全保障(供給地のみならず国内生産力の維持)にとっても今後はアフリカが

より重要視されていくでしょう。笹川会長は今回の訪問も踏まえ、アフリカ開発支援の最重要分野はやはり農業分野であると力説しておられました。SAAはまさしくその言葉を実践してきています。

来月には日本でTICAD(東京国際アフリカ開発会議)閣僚会合が開かれます。食料安全保障についても活発な議論が行われることを期待したいと思います。



[研修組合の農業製品]



[キャベツ畑にて]

(以上)